文豪先生

bungousensei

第七話

中川善史

絵・かないてつお

川村助役とその奥さんの松子さんが住んでいる家は、古い家ですが、もとはとあるお金持ちの別荘だったのです。そのお金持ちは、だいぶ昔に、人里離れた辺鄙な場所で夏を過ごしたいということで、この別荘を作ったのですが、あまりに辺鄙なので来るのが面倒になったらしく、何年もほったらかした挙げ句、村に寄贈したのです。

誰も住まないと荒れ果ててしまうので、川村夫婦が住んでいるのでした。

昼間はまだ汗ばむくらいでも、さすがに夜になると脇の下を通り抜けていく風に、ひゃっと身が縮まります。

川村助役の妻・松子さんは、夕暮れの空に浮かぶ家の屋根を見上げて、

「寒くはないかい」

と、言いました。

「そんな薄着で大丈夫なの」

屋根の上には、安寿がいます。

「だいじょうぶ」

と、答えました。

「私は、子供にはどっさりと厚着をさせてやって、たっぷりと滋養のあるものを食べさせてやりたいのに、おまえときたら・・・」

・・・いつも下着のような格好で屋根の上で過ごしているのです。

安寿は森の中の道に絵本の天使のような格好で倒れているのを見つけられて、身寄りがわからないので川村助役が引き取って育てているのでした。

そこへ、ばたばたと古くさいエンジンの音が聞こえてきて、家の

敷地にオート三輪が入って来ました。（むかし、オート三輪という乗り物があったのです。どんな乗り物か・・・挿絵に任せましょう。）

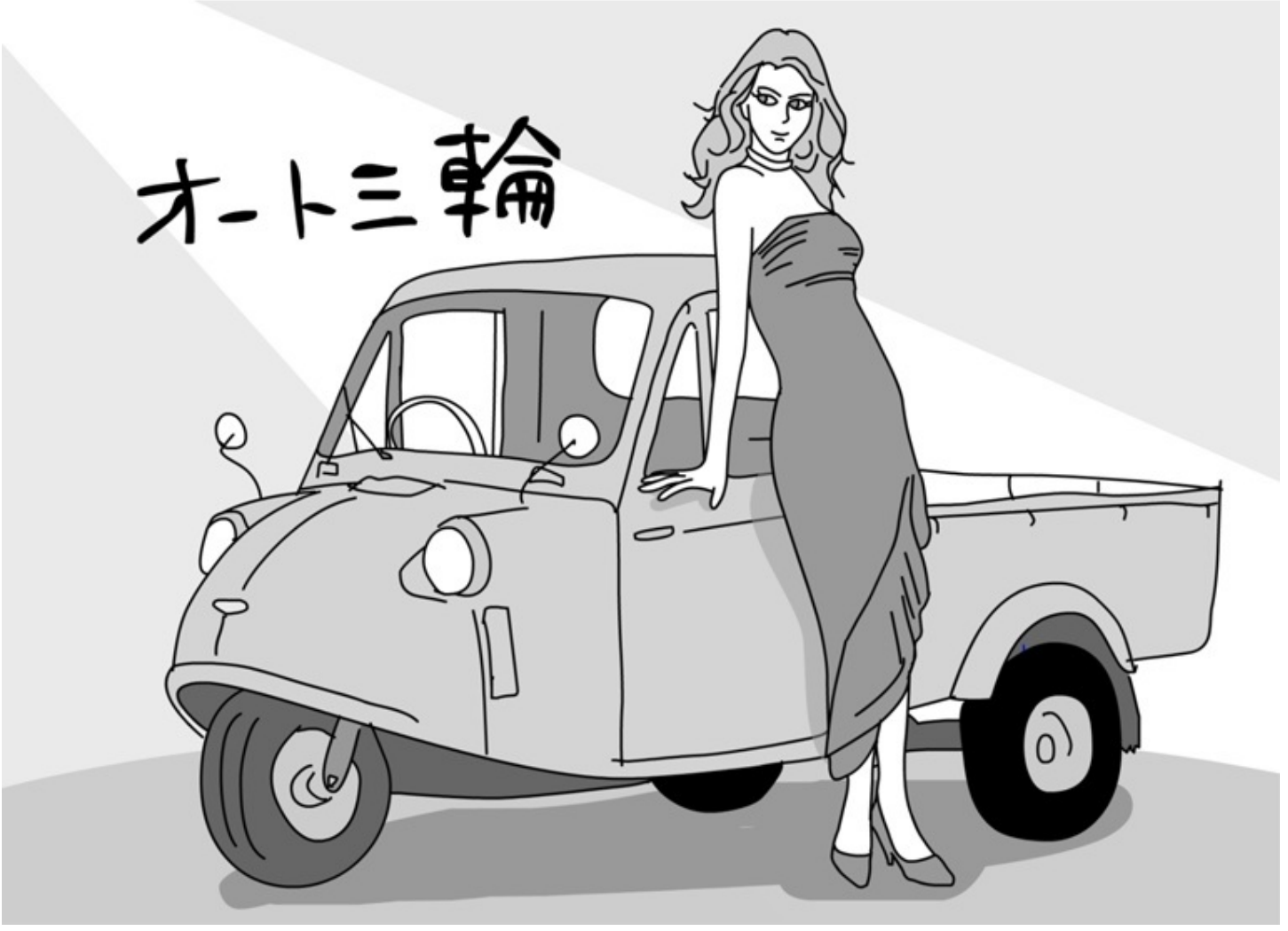
川村助役が帰ってきたのです。

「おかえりなさい」

「ただいま」

屋根を見上げるといつものように、安寿がこちらを向いて手を振っています。そして、ひらりと宙に浮くと、そのまま顔からべたっと地面に落ちました。

「だいぶ、見慣れたけれど・・・」



と、川村助役、
「もっと穏やかな降り方はないものかい」

安寿は、毎朝、川村助役とともに家を出て、オート三輪に乗って分教場に向かいます。授業が終わると、川村助役はまだ役所で仕事がありますので、松子さんが迎えに来ます。帰りは松子さんと歩いて帰るのです。

松子さんは、安寿に花や木や虫の名前を教えます。松子さんが指し示す花や木や虫を見る時の安寿の顔は輝いています。何を見ても嬉しそうな顔をします。でも、松子さんが教えた名前を覚えているかどうかはわかりません。

安寿はいつもにこにこしています。分教場に行く時も、教室でも、家にいる時もそうです。眠っている時は、安らかな、なんの不安もないような顔をして眠っています。

いつもにこにこしている安寿を見て、川村夫婦は、それはそれは幸せなのだろうと思い、自分たちもうれしくなります。

けれど、安寿は「何が」うれしいんだろう、と想像してみると、

わからなくなるような気がすることもあるのです。あるいは、安寿は「何が」幸せで「何が」不幸せなんだろう、と考えてみると、わからなくなります。

「安寿は、何がなくても幸せなんだよ。分教場に行ったり、屋根に登ったり、ご飯を食べたりと普通のことをしているだけで、ああやってにこにこしていられるんだ」

と川村助役は、結論めいたことを松子さんに言ったことがあります。

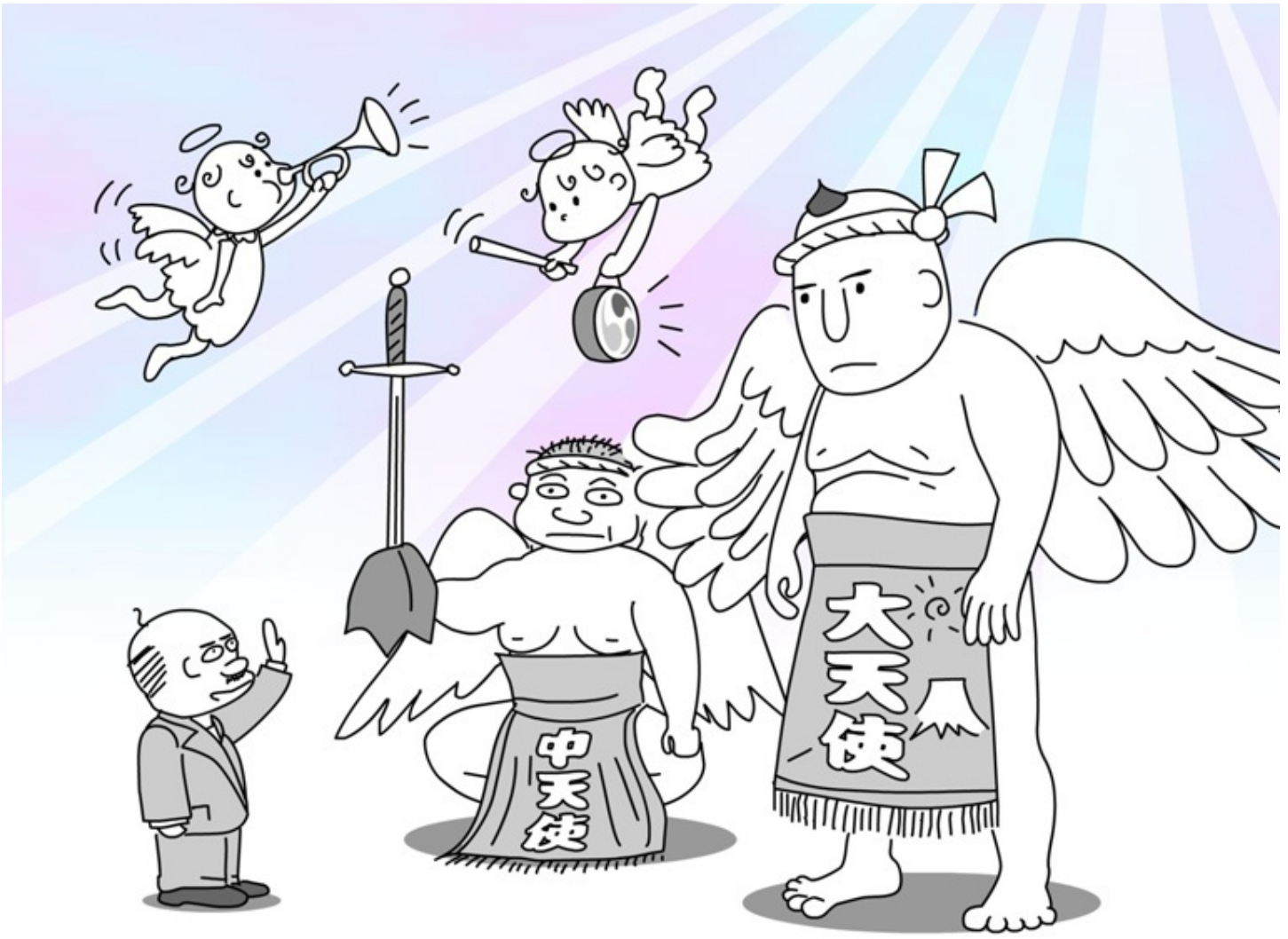
「それは、何か特別なことがないと幸せになれないのに比べれば、うんと幸せなんじゃないかね」

屋根に登って空を見上げている時も、微笑みを浮かべています。村長の白井竜子女子によれば、安寿は自分のふるさとである天上世界を恋しがって屋根に登るのだ、というのですが、それだったら、もう少し切なげな顔をしそうなものだ、と川村助役は考えたりするのです。

「あの顔は、ふるさとだから天上を見上げていると言うよりも、た

だそうしていたいから、そうしているだけという風に見える
な・・・・・お前は天使なのかい。それとも人間なのかい・・・」

そんなある夕食の時、川村助役が村の地酒『酔龍』を一口飲んで
ほっと息をついたところに、安寿が珍しく自分から
「あした、たのしみ」
と言い出しました。
川村夫婦は顔を見合わせました。安寿は、話しかければ答えるの
ですが、自分から話し始めることは滅多にないのです。しかも、な
にか楽しみなことがあるというのです。
「なにが楽しみなんだい」
「あした、なかま、くるの。たのしみ」
「仲間？分教場のみんなは仲間じゃないのかい」
「分教場のみんなは、ともだち。あしたくるのは、なかま」
ともだち・・・なかま・・・さて、仲間とはなんだろう・・・と、
川村助役は、盃をちびりとやりながら考えました。安寿のような天
使がいっぱい分教場の時計台に舞い降りてくる光景が頭の中に浮か



びました。

「いや、まさか・・・」

と自分の妄想を打ち消そうとした途端、頭の中に高らかなラッパの音と合唱が響き渡って、分教場の上空の雲の中に大天使・ミカエルのような姿が浮かび上がりました。

「おいおい・・・親分の登場かい・・・」

想像の中で、大天使・ミカエルは供の天使を引き連れて、校庭に降りてきます。巨大なその姿を見上げて、川村助役は

「あ、どうも」

と言いました。言ってか

ら、天使に向かって「あ、どうも」は、まずかったかなと思いました。案の定、大天使は非情な目で見下ろして、
「我は、堕落した人類を亡ぼさんがために神より使わされしものなり」
と厳かな声で言いました。ラッパの音はいつしか「幻想交響曲」に変わっていました。助役は青ざめて、
「あ、ちょっとちょっと・・・」
たちまち空に黒雲が湧き上がり雷鳴が鳴り響き竜巻が・・・。
・・・川村助役は、これはいかん、と頭を振ると、また盃をちびりとやりました。そして、もっと穏やかでにこやかな大天使の顔を想像しました。
「あ、どうも」
と大天使が言いました。目尻が垂れ下がって、口元がだらしなくなっています。
「いや、これはこれは、わざわざお出でいただきまして、ありがとうございます」
と、川村助役が答えます。

「どうもどうも、お招きいただきまして。
いや、この実に美しい結構な村でげすな、
よいしょっ」
そういって天使は自分の額を
ぴちゃぴちゃ叩きます。
「いえいえ、天上界にはとても
かないませんよ」
と、川村助役も思いっきり
揉み手をします。
「またあ、助役さんたらお世辞が
うまいんだからあ」
「とんでもない、大天使さま
こそ・・・」
そして、友好的な会話を交わし
ながら村の中を案内し、
最後には村の名産品などを
土産に持って帰ってもらう・・・。

「どうも、お世話になりました、なにからなにまで」
「いえいえ、またお越しください。それから、この村のこと、天国によろしくお伝えください」
大天使は、再び上昇し雲の間に消えてゆく。ふと足元を見ると、村の名物の饅頭が落ちている。あまりいろいろ土産を上げたので落っことしていったのか。
「大天使さま、忘れ物ですよ・・・。困ったなあ、この饅頭早く食べないと固くなっちゃうのに・・・」
想像は、そこで途切れました。
「これでよし・・・」
川村助役は深く頷きました。
松子さんと安寿が不思議そうな顔をして、助役の顔をのぞき込んでいました。

次の日、川村助役は、仕事の合間合間に校庭に出ては気がかりそうに空を見上げていました。通りかかった民子が
「助役さん、今日は雨は降りませんよ」
もちろん、空は晴れ上がっています。少し背伸びをすれば、天使の羽のはじっこでも見えそうな、いや、触れられそうないい天気です。実際に、思わず背伸びをし腕を伸ばしそうになって、あわててやめました。

安寿は、今日も休み時間になると校庭に出てきて時計台に登ります。その時、たまたま外に出ていた川村助役と目が合いました。
「きょう、なかまが、くるの」
「ああ、仲間が来るんだな」
どんな仲間が来るのか、川村助役は気になって仕方がありませんでした。安寿は相変わらず時計台の上で空を見上げています。

午前が終わりましたが、仲間は来ませんでした。　お昼休みになり、お昼ご飯を食べ終わっても、仲間は来ませんでした。

お昼ご飯のあと、安寿と川村助役は校庭に出てきました。
「仲間、来ないな」と川村助役がいうと、
「くるよ」と、時計台に登った安寿が答えます。
「でも、なかなか来ないじゃないか」
「あ、来た」
ただし、今度は空を見上げているのではなくて、校庭の向こう側を見ています。
校庭の向こう側に人影が現れました。文豪先生とろんろんでした。安寿が手を振ります。
「やあ」
と、文豪先生もステッキを振り上げて応えます。
文豪先生が時計台の下まで来ると、安寿はひらっと宙に飛び出しました。
「なかまー」
安寿は文豪先生めがけて落ちてきました。文豪先生は大きくよろけました。川村助役は、
「安寿、仲間って文豪先生のことだったのかい」

「ぶんごーせんせい、きょう、ついし。あんじゅも、ついし。だから、なかま」
先生も安寿も追試の仲間だったのです。

「じゃあ、文豪先生と安寿は、こっちで黒板に書いた追試の問題をやってください。・・・そして、残りの人は、こっちで勉強のわからないところを教えあう時間にしよう。まず、みどりちゃん、幸太に教えてあげて。それから、あとの人は僕とわからないところをやってみよう。国語算数社会理科、なんでもいいよ」
と、砂府青年が言いました。
みどりちゃんは立って幸太の横に椅子を持ってきました。

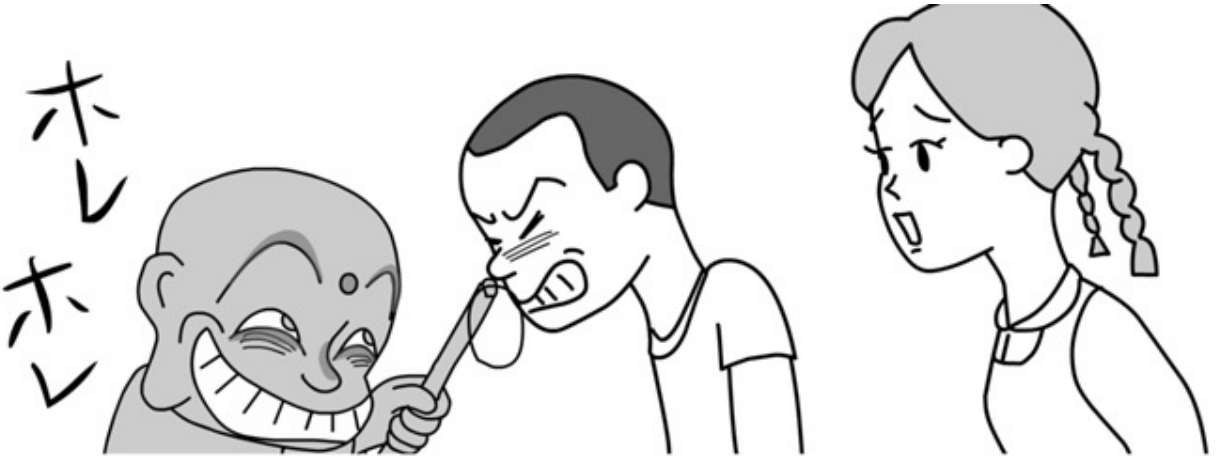
「さ、幸太、今日はなにをやろうか」

ここのところ、砂府先生はみどりちゃんに幸太の面倒を見るのを任せているようです。勉強が良くできるみどりちゃんも、幸太を弟のように思っていて、教えるのが楽しいみたいです。

幸太にしてみれば、もちろんうれしくないはずはないのです。なんだか、この頃、勉強が楽しくなってきたような気もするのです。そして、みどりちゃんがまぶしく見えることもあるのです。なんだか、近頃、どんどんお姉さんらしくなっているように思えるのです。

ところが、今日は、まぶしいのを通り越して苦しいような気がしてきました。いつもは、みどりちゃんがそばに来ると、もっと近づきたいような気持ちになるのに、今日はそれと同時に離れたいような気持ちも起きてきたのです。

地蔵の「秘密にしていることあるでしょ」がひっかかっているのは間違いありません。「ばらしちゃうよ」が棒のようにつっかえています。どうにも、これ以上みどりちゃんを好きになってはまずいような気がしているのです。



「どうしたの？　なにやる？」
みどりちゃんは、へんだな、と思いました。いつもなら、こういうと子犬が飛びついて来るみたいにうれしそうになるのに、こんなに不機嫌な幸太は見たことがありません。
「じゃあ、こないだの続き、分数の足し算やろうか」
みどりちゃんがそう言って幸太の表情を伺っていると、下を向いたまま、
「いいよ」
「いいよ、って。今は、教えあう時間じゃないの」
「おれ、勉強したくない」
そう言った途端に、幸太は苦い物を舐めたような気持ちになりました。
「だめだよ。幸太、どんどん勉強わかるようになってきたじゃない。もうちょっとだよ。やろうよ」
「もう、いいよ」

苦い気持ちがどんどん広がっていきます。まるで思っていないことを口が勝手にしゃべるのです。

「幸太、しっかりしなよ。あなた、私が来年、中学に行っちゃったら、分教場で一番上になるんだよ。今度は、幸太がちっちゃい子にいろいろ教えてあげなきゃならないんだよ」

「わかってるよ、そんなこと」

「わかってないよ。全然、わかってない」

「わかってる」

「わかってない」

「わかってる」

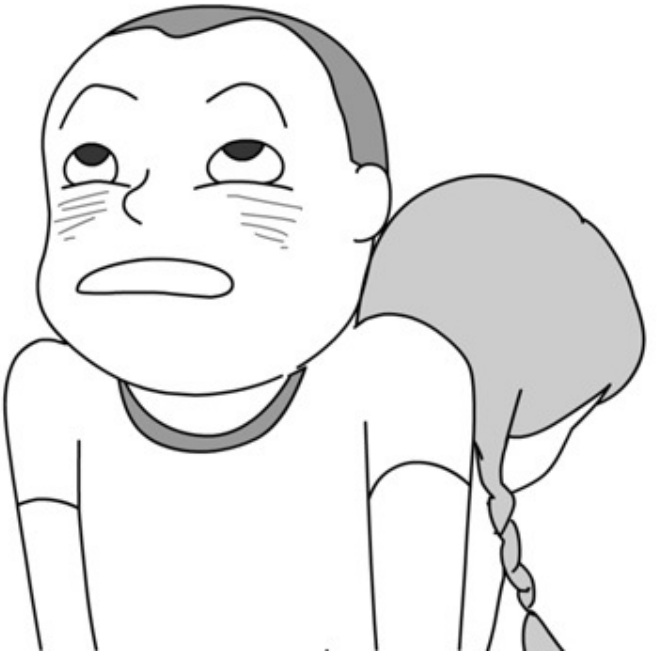
「わかってない」

「いいよ。もう」

と、幸太はそっぽを向いてしまいました。

それを見たみどりちゃんも腹を立てたように、向きを変え幸太に背を向けてしまいました。

幸太はびっくりしました。みどりちゃんが、向こうを向いてしまうことなんてあり得ないと思っていた自分に気がつきました。



そっぽを向き合っていますが、みどりちゃんの背中は、幸太の背中にふれていました。触れているのは、ほんのぽっちりでしたが、温かさが伝わってきました。

その背中がふるえているような気がしました。幸太は再びびっくりしました。泣いているのかしらん・・・。

さて、こちらは、安寿と文豪先生の追試組です。

文豪先生、こんどこそは零点回避・・・いや、零点じゃなければいいというものではありません。満点で追試クリアしなければならないとの決意を込めて、しばし腕組みをして瞑目し、集中力を高めます。

「獅子は、弱いものを倒す時でも全力を尽くすのだ・・・」
まさに剣豪が抜刀するが如き気合いを入れて、目をかっと見開き鉛筆を手に取りテストに向かおうとすると、となりの安寿がこちらの顔をのぞき込んでいるのに気がつきました。剣豪の気合いはたちまち蒸発してしまいました。
「君、ちゃんとテストを受けないとだめじゃないか」
安寿は、先生が口を聞いてくれたのがよほどうれしかったようで、
「えへへー」
「いや、えへへじゃなくて」
「あんじゅ、ぶんごーせんせいとなかま。せんせい、すき」
「いや、好きはありがたいが、君もね、テストやらなきゃね。わかるだろ、テスト」
「わかるよー」
「じゃあ、やりなさい」
「えへへー」
「えへへじゃないんだがな。前の黒板に問題が書いてあるね。わか

るだろう。ええと、君の問題は、一番、『すうじの、いちからじゅうまでを、かんじでかきなさい』だ。わかるね」
「うん」
「じゃあ、書いてみなさい」
「えへへへ」
「いや、えへへじゃないよ。あの、つまり、数字はわかるだろう？」
「わかる」
「一から十までだ」
「うん」
「言ってみたまえ」
「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、きゅう、じゅう」
「そうそう」
「じゅういち、じゅうに、じゅうさん、じゅうし、じゅうご、じゅうろく・・・」
「いや、そこまでは言わなくてもいい。今、言ったことを書いてみたまえ」
「じゅうろく？」

いや、そんな今の事じゃなくて、まず『一』だ」

すると、安寿は、解答用紙に大きくひらがなで「いち」と書きました。

「そうじゃない。それは、ひらがなだ。今日は漢字のテストだ。漢字で書くんだ。わかるか。『いち』といっても、書くやり方は、君が書いたひらがな、そして、数字、漢字とあるだろう？そのうちの漢字だ」

「えへへへ」

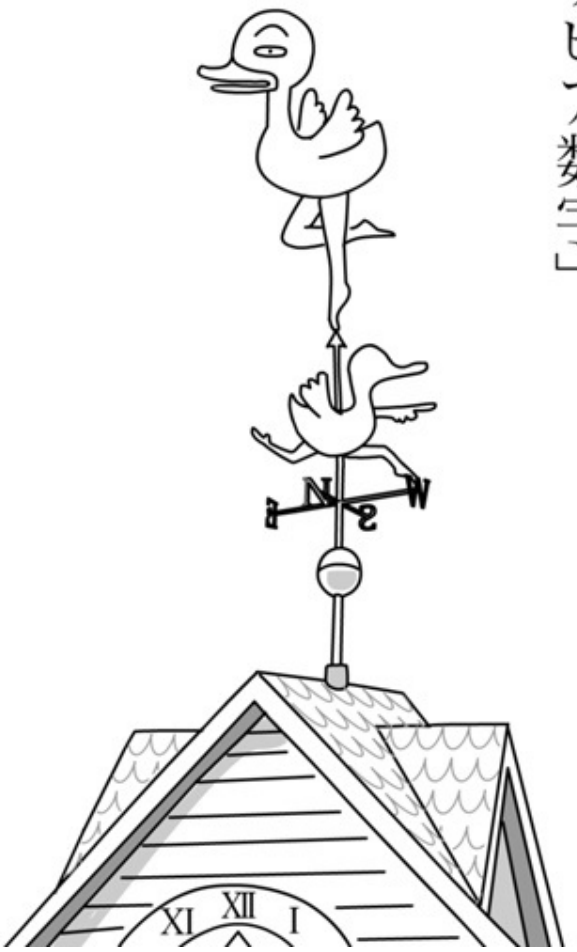
「わかっているのかな。数字はわかるんだろうな」

「わかる」

「じゃあ、この紙のはじっこに書いてみなさい・・・1，2，3，そうだ。それが、数字、アラビア数字というやつだ」

「あらびあ数字？」

「今書いたような数字、それがアラビア数字」
「数字は、あらびあ？」
「いや、アラビア数字がすべてというわけじゃない。あと、こういうローマ数字とかあるだろう」
と、文豪先生は、紙の上にⅠ、Ⅱ、Ⅲと書いて見せました。
「これがローマ？」
「うーん、まあ、古代ローマでできたんだろうな」
「古代ローマって？」
「ええと、そんなことを私に訊かれてもなあ、なにをどう言えばいいのか・・・その、ローマ帝国は知っているかい？」
「しらない」
「そうだろうね」
「おしえて」
文豪先生、ふたたび腕組みをして目をつぶりました。どうやったら、この子にローマ帝国を説明してやれるのか・・・。なんだか質



問の無間地獄に陥って話がとんでもないところへ行ってしまいそうな気がしてきました。

というところへ砂府青年の声が掛かりました。

「はい、追試組の人、時間ですよー。じゃあ、解答用紙を机の上に出して・・・あれ？　文豪先生、また、白紙ですか？」

文豪先生は、ローマ帝国について考えていたそのままの姿勢で、

「砂府君、多くは言うな・・・いろいろ・・・あるんだよ」

「先生、どうなさったんですか。まったく・・・あ、安寿の解答用紙・・・」

「安寿も零点だろうな」と文豪先生。

「すごい進歩だ！」

と、砂府青年が叫びます。

「今まで、安寿の解答用紙は白紙ばかりだったのに、ひらがなだけど、『いち』と大きく書いてある。僕は、恥ずかしながら、この子がひらがなさえ理解できているのか、疑っていたんですよ。安寿、よく書けたね」

という砂府青年に安寿は恥ずかしそうに

「えへ。ぶんごーせんせいのおかげ・・・」

砂府青年は改めて文豪先生の偉大さを見直したのです。テストは二回目も零点でしたが。

文豪先生、またまた零点で、立ち直れるのか。いやいや、それよりも、幸太、どうするの？　地蔵堂の製作もあるはずなのに。と言うわけで、次回に続きます。

（つづく）

文豪先生　第７話

http://p.booklog.jp/book/50065

著者：中川善史
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/50065

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/50065

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.